

國學院大學學術情報リポジトリ

平家物語と絵画資料研究：
國學院大學所蔵資料を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 葦江 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002377

平家物語と絵画資料研究

— 國學院大學所蔵資料を中心に —

松尾 葦江

一 はじめに

近年は国文学でも絵画資料の研究が盛んである。美術史研究との相互乗り入れは、一部の作品を除いて必ずしも十分とは言えないが、書誌学に近い領域から、絵本・絵巻の制作環境を究明する研究は成果を挙げつつある。⁽¹⁾ いっぽうでは、単に享受史の一環としてのみならず、絵画資料を「読む」ことによつて、その作品自体の読みに反照させていくような論も増えつつある。後者の方法的妥当性は、未だこれから問われていくことになるのであろう。平家物語の場合、関連絵画資料にはどんなものがあるか、⁽²⁾ 今後の研究課題としては何があるのか。管見に入った資料や本学所蔵の資料を中心に、ここで情報を整理しておくことにした。

かつては、平家物語には絵巻が少ないと言われていた。語り物だからだろうと憶測する向きもあつたが、そういうわけではない。林原美術館所蔵『平家物語絵巻』三六軸が最も有名であるが、平家物語のストーリーを追つて絵巻にしたもの以外にも、源平盛衰記の絵巻や、木曾義仲の一代記を絵巻仕立てにしたもの、屋島・一ノ谷合戦の絵巻など

があり、下絵や白描のものも残っている。冊子の奈良絵本も平家物語・源平盛衰記合わせて十点以上現存することが知られている。ただ王朝物語の場合とやや異なるのは、屏風や絵馬の数が多いことであろう。屏風の画題は、一ノ谷・屋島の合戦、大原御幸、それに小督の挿話などが主であるが、平家物語の名場面の断簡を数枚貼って仕立てたものもある。全国に存在する源平図屏風は、個人蔵も含めれば総数を推定することすらできない。さらに近世のさまざまな文物の中にモチーフとして溶解し、変容していった平家物語の図像の総体を思い描くことは殆ど不可能に近いであろう。

史料の上では落合博志氏が紹介したように^③、『入木口伝抄』に元亨―元弘(一二三二―一二三四)頃のこととして、「山上平家絵詞」の存在が見える。同様に保元・平治物語や後二年合戦の絵が比叡山にあつたことも知られており、比叡山では軍記物語に関連する絵巻・絵詞の類が保存され、享受されていた(あるいは制作もされていたか)ことが分かっている。永享六(一四二四)年六月十三日の『看聞日記』には「平家絵十巻」とあり、琵琶法師の語りが盛んだった時期に併行して絵巻も作られたらしい。すなわち平家物語が成立以来二度目の流行を迎えたと思われる一四世紀初めには、絵画資料も作られ愛好されていたと見ることができ。しかしそれらは殆ど残っておらず、現存絵画資料は中世末から近世にかけてのものが大半である。近世に出版された版本の挿絵は、平家物語が四〜五種、源平盛衰記は二種類あり^④、それらと絵巻・絵本との詳細な比較研究は、未だこれからである。平家物語や源平盛衰記は、絵画資料を中心に見れば、近世の武家社会において広く親しまれ、愛蔵された文化財であるが、それに芸能が関係することによって大きく基盤を広げ、さらに支持層を拡大することになったのであり、その広汎さはもとの作品からの引用関係だけでは覆いきれないというべきである。

二 共同研究による調査報告から

平成二十二年度から始めた科研費による共同研究「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・歴史を総合して―（課題番号22320051）では、すでに左記のような絵画資料を熟覧、または調査した（平家物語によるものをa、源平盛衰記によるものをbとしておくが、どちらともいえないもの、c 中世近世の芸能などが混交しているものもある）。

- 1 絵巻・画帖（b 京都個人蔵 b フランス国立図書館蔵 a 専修大学図書館蔵）
- 2 奈良絵本（a 明星大学図書館蔵 a 洛東遺芳館蔵 a 真田宝物館蔵 a 旧島津家本 b 海の見える杜美術館蔵 a 神奈川歴史博物館蔵）

*このほか、平成二十三年十一月古典籍展観大入札会に出陳されたa三〇帖のものもある。

- 3 屏風（a b 名古屋個人蔵 a 神戸市立図書館蔵〈屋島合戦〉 a 神戸市立図書館蔵〈源平合戦図〉 c 生田神社蔵 b 兵庫歴史博物館蔵〈石橋合戦〉）

*このほか、a ベルン歴史博物館蔵のものも平成二十三年六月、修復披露として展示された際に一見した。

これまでの調査を通して分かってきたことを、断片的ではあるが整理しておく。なお『思文閣古書資料目録』223号掲載のa 奈良絵本一二帖は本学所蔵となった。詳細は別途発表の予定である。

1 絵巻・画帖について

① 京都個人蔵源平盛衰記絵巻

現在京都市在住の個人が所蔵している、水戸徳川家旧蔵という一二軸の絵巻⁶であり、詞書は源平盛衰記による。近世前期、寛文延宝（一六六一～一六八二）頃の作か。絵は豪華なものである。詞書は盛衰記本文を適宜抜粋、要約しており、記事（絵とする場面）の選択基準については今後の研究に期待されるが、仏教的記事は殆どとりあげない方針らしい。政治批判、儒教倫理に基づく歴史書を意図したとみるべきであろう。他の奈良絵本や絵巻との直接的な関係は今のところ見いだせない。水戸藩といえはこの頃、西山公こと徳川光圀の命により『参考源平盛衰記』の編纂が行われていたことが思い合わされるが、絵巻の制作と関連があつたかどうかは未審である。

② フランス国立図書館蔵源平盛衰記画帖

一九九四年のフランス国立図書館新着資料解題に紹介されていたもので、源平盛衰記の絵本から絵のみ一一五図を取って画帖に仕立てたらしい。奈良絵本を思わせる一七～一八世紀の土佐派の彩色の絵で、本文はない。一九九三年三月に骨董店ドロワから購入したという。

調査したところではもとは冊子かと思われる。表紙や題簽は改装の際のものであろう。本文はないが、明らかに平家物語ではなく源平盛衰記に基づく。現在、絵は全く順不同に貼られ、同定できる場面は一部にとどまる。しかし有名な場面がいくつも欠けており、失われたか、あるいは複数の画帖・屏風などに分けて仕立てたのかもしれない。絵は片面もあり見開きもある。すやり霞は棹を描かずべつたりと金粉を蒔いており、人物の唇に差した朱が目立つ。植物や波の描き方がやや雑で、人物などの精巧さとはちぐはぐな感がある。

今まで見た源平盛衰記の絵巻と、全部は一致しないが、海の見える杜美術館蔵奈良絵本源平盛衰記とは、一部構図が一致するようである。

③専修大学図書館蔵屋島合戦絵巻

本文はすでに翻刻があるが、⁽⁷⁾寛一本系統である。三軸。冒頭に来るはずの詞書が欠けているとの解題の指摘はたぶん正しいであろう。義経が平家討伐に西国へ出発するところから屋島合戦の決着までを含む。絵は土佐派ふうの彩色・奈良絵の絵巻で、寛永(一六二四)〜一六四四頃の書写とするのは肯ける。すやり霞には青と白を用い、人物や衣装などに金銀の使用は少なく、風景や建物は様式化して単純になっていることが多い。絵師は複数の人間が分担したらしい。弁慶が兜巾をつけていたり、貴人が御簾でなく絞った幕の奥に座っていたりと、やや珍しい描き方もある。継信最期の場面の構図や、那須与一を扇の的のみならず平家の兵士の舞うのを射殺す場面をも描くこと、また鑑引でも二場面描くことなど、中世末期から近世の享受者が、芸能をも含めて源平の物語として認知していたことが知られる。

土佐派ふうの源平絵巻はほかにも何点か所在が報告されており、bでは斎宮歴史博物館蔵の絵巻が知られている。

2 奈良絵本

今回の共同研究でこれまでに熟覧、書誌調査したものには、①明星大学図書館蔵一〇帖(巻一・巻十二欠)、②洛東遺芳館蔵二四帖、③個人蔵旧島津家本三〇帖、④真田宝物館蔵三〇帖、⑤神奈川歴史博物館蔵二四帖があり、このほかにかつて私が見たものでは、⑥白百合女子大学図書館蔵二八帖(巻十八・巻二十欠)や⑦永青文庫蔵三六冊のもの

がある。そのほか、海外^⑧や国内の個人蔵としてもまだあるらしい。⑧津軽家旧蔵本一二帖（國學院大學図書館蔵）や⑨平成二十三年十一月古典籍展観大入札会に出た三〇帖など（以上、いずれも平家物語一二巻）、新資料がこれから出る可能性がある。⑩海の見える杜美術館蔵五〇帖は、完本としては今のところ唯一の源平盛衰記奈良絵本だが、前述のフランス国立図書館蔵画帖がもとは冊子だったらしいことを考えると、ほかにも制作された可能性がある。だいたい寛文延宝（一六六一～一六八一）頃の作である。

これら①～⑨のうち、⑦はまったく画風が異なり、①も背景の描き方などからみて、別種としておいたほうがいいようだ。それに対し、②③④⑤⑥⑨、それに⑧と⑩も極めて近い画風を示し、同じ工房での制作か絵師の共通性を想定できそうな関係にある。⑥は惜しいことに大半の絵が剥がされて失くなっているが、残っている絵（僧侶や災害場面など）を見ると共通性が強いことが分かる。⑨も何枚か絵が抜かれているらしい。これらの絵本と版本挿絵との関係や制作事情、原本文の受容態度などはこれからの研究課題である。

3 屏風

さきにも述べたとおり、個人蔵まで含めれば源平の物語を画題にした屏風の所在・総数は分かっていないし、完全なデータベース化は難しいであろう。殊に平家物語や源平盛衰記の本文のみに基づいて描かれたもの以外に、幸若・能・歌舞伎などの要素を自在に取り込んだ絵巻や絵本の断簡を貼り込んだ屏風、もともとそういう立場で制作された屏風等も少なくない。生田神社蔵の屏風などもそのひとつと思われる。制作年代は中世から近代までいろいろである。

三 國學院大學所蔵資料の平家物語関連絵画資料について

1 絵巻

①木曾物語絵巻

源平盛衰記の本文をもとに義仲の一代記を絵巻にしたもの⁹⁾。寛文延宝(一六六一—一六八一)頃の制作と見立てる人もあり、元禄初期を下らないであろう。出光美術館には流布本平家物語をもとにした義仲一代記の絵巻があり、千葉市立美術館や国立歴史民俗博物館には義仲の合戦を題材にした屏風がある。本学所蔵の絵巻は二軸、絵は一三面あり、義仲の生い立ち、都入り以前が詳しい。詞章を見ると、前半は源平盛衰記の本文をほぼそのまま引用しているが、後半は要約した内容を記しており、細部では盛衰記と一致しない字句も見いだされる。殊に目を惹くのは、最後が頼朝の鶴岡八幡参詣らしき場面で終わることである。幸若舞曲や御伽草子などでは、所知入りといって、主人公の武士の凱旋でめでたく終わることがよくあるが、義仲を主人公としているにもかかわらずいわば敵役の頼朝のにぎにぎしい成功場面で終わるのは、現代のわれわれにはちよつと違和感を抱かせる。しかし、本絵巻の出だしには、

それ盛りなる者はいくばくならずして衰へ、おごれる者は久しからずして滅ぶ。されば平家の一類、四海をたなごころに握り、栄耀身に余り、王位をないがしろにせしかば、幾程なくして木曾義仲に都を追ひ落とされ、西海の波に(漂)よひ、浮き名を流して滅びにけり。義仲すでに威勢をふるひ、運を開けしかども撰録の臣を侮り、院宮をさみせし故に天命尽きて、日ごろの忠節むなしくなれり。

という、盛衰記の本文にはない序がついており、結尾は、

それより天下一統の代と成りて、諸国に背く人もなく、雨風時に従ひて、治まる世と成りにけり。鶴が岡の八幡

宮を造営ましまして頼朝参詣し給ふ。源氏の世栄えて、年去り年来たれども衰ふる事もなきは、ひとへに八幡の御守り深くまします故なりとぞ聞えける。

となつていて（引用に際して私に漢字を宛てた）、義仲一代記のかたちをとりつつ頼朝を祖とする武家時代の祝言を盛り込んで制作したという立場が明瞭である。

源平盛衰記を本文とする絵巻には、先述の通り、水戸徳川家旧蔵の一二軸のものがあり、源平盛衰記は、版本の残存数の多さからみて、近世には平家物語と並んで、あるいはそれ以上に流布したものと思われる。古い文庫などでは文学でなく史書に分類されており、嫁入り本ふうの美しい表紙をつけた列帖装の写本も何点か伝わっている。

②平家公達草紙白描絵巻

平家公達草紙は、現存平家物語諸本の中にはない、しかしいかにも平家物語の一場面であるかのような断章の集まりである。¹⁰鎌倉末期から南北朝に成立したとみられる絵巻と共に伝わっており、それらが同一の独立した作品なのかどうかも明確ではない。平家物語との関連は諸説あつて結論は出ていないが、その関心、人物への視点や表現等々において、平家物語ときわめて共通性が高い。例えば、平家物語に採られずして残った平家時代の追憶の記述だと言つても通用しそうである。あるいは、平家物語の補遺を装った掌編か、異本創出過程でこぼれ落ちた断片という見方もできるかもしれない。

現存伝本は三種に分けられ、それらの内容は重ならない。すなわち、〈1〉松永記念館本（福岡市立図書館蔵。南北朝期写。詞五段・絵四図）、〈2〉東博本（天保三「一八三二」年 狩野養信写。詞六段・絵九図）、〈3〉宮書本（鎌倉末期写。詞三段・絵なし）の合計一四段の断章と白描の一三図が現在残っていることになる。¹¹

本学所蔵にかかる絵巻は、(2)東博本の系統金刀比羅本(弘化二「一八四五」年冷泉為恭奥書のある模本)の、翠谷茂による明治三十一年末模写で、東博本・金刀比羅本とは、絵の配列が一部異なっているようだ。¹²⁾透き写しの紙を用いているため展覧にはやや不便である。白描だが一部の人物の唇に赤を入れていて、黒髪の黒や衣装の流れるような線描が美しく、白、黒の中に点赤がどきつとするほどなまめかしく感じられる。都落ちする重衡が女房たちに別れを告げに来る場面など鎧武者の画もあるのだが、全体にあたかも王朝物語の一場面のような雰囲気をもつ。

③堀川夜討絵巻

『義経記』と幸若舞曲の詞章をもとに描かれたと思われる絵巻。一軸。本文はない。料紙に金箔を散らした豪華な印象の絵巻である。近世中期の作。いわゆる「堀河夜討」——頼朝が義経追討のため派遣した土佐坊を弁慶が連行し、糾問するが土佐坊は誓文を提出して逃れ、直後に堀河の義経邸へ夜討ちをかけるという内容である。静が武装して奮戦する絵があるので、幸若舞曲との関係が推測され、『義経記』の登場人物も描かれているから、これにも基づいていると考えられる。¹³⁾平家物語、殊に読み本系諸本は弁慶と土佐坊の対決場面など、堀河夜討の記事を重視しており、中世から近世にかけて人気のある画題だったようだ。

④恋塚物語屏風

読み本系平家物語の延慶本・長門本・四部合戦状本・源平盛衰記に見える文覚の発心譚を題材にした室町物語『恋塚物語』の断簡(もとは横本だったか)を屏風に貼ったもの。寛文延宝(一六六一—一六八一)頃の奈良絵本と思われる。本文は古態とされる陽明文庫本に近く、¹⁴⁾絵は七図ある(陽明文庫本には絵がない)。但し、本文の冒頭部分を欠いて

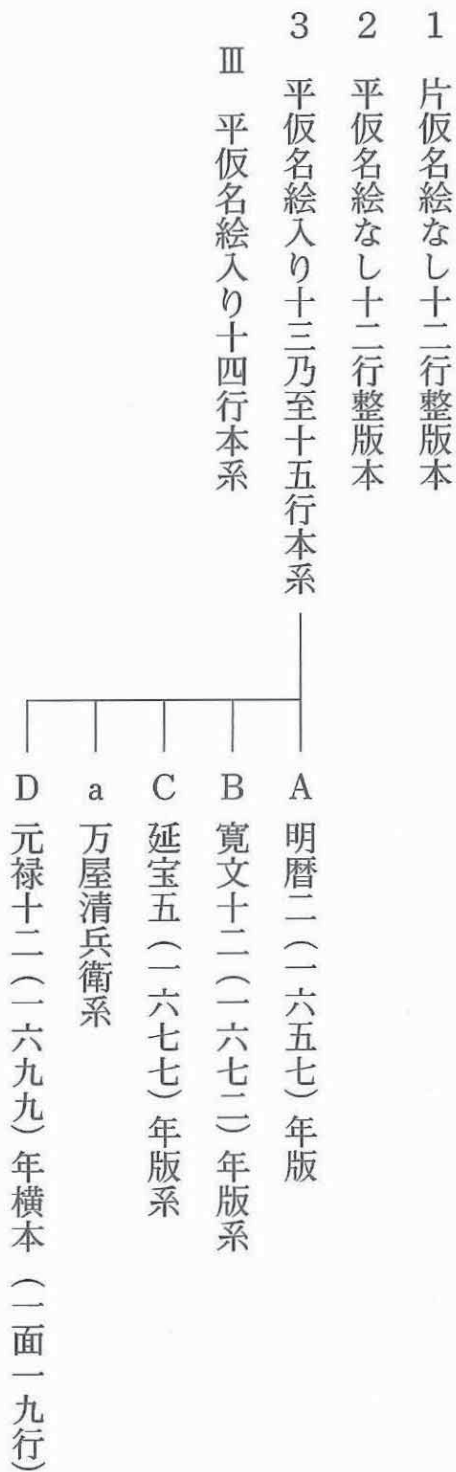
いる。

2 版本の挿絵

①平家物語版本

平家物語の版本の挿絵には四乃至五種類ある（万屋清兵衛系と呼ばれる版の挿絵は明暦版の変形という）とされている。¹⁵ また源平盛衰記の挿絵は二種類である。

平家物語の整版本を本文の継承関係と絵の相違を加味して分類すると次のようになる。¹⁶ 1～3とⅢとは版による分類で、A～Dとaは絵による分類である。

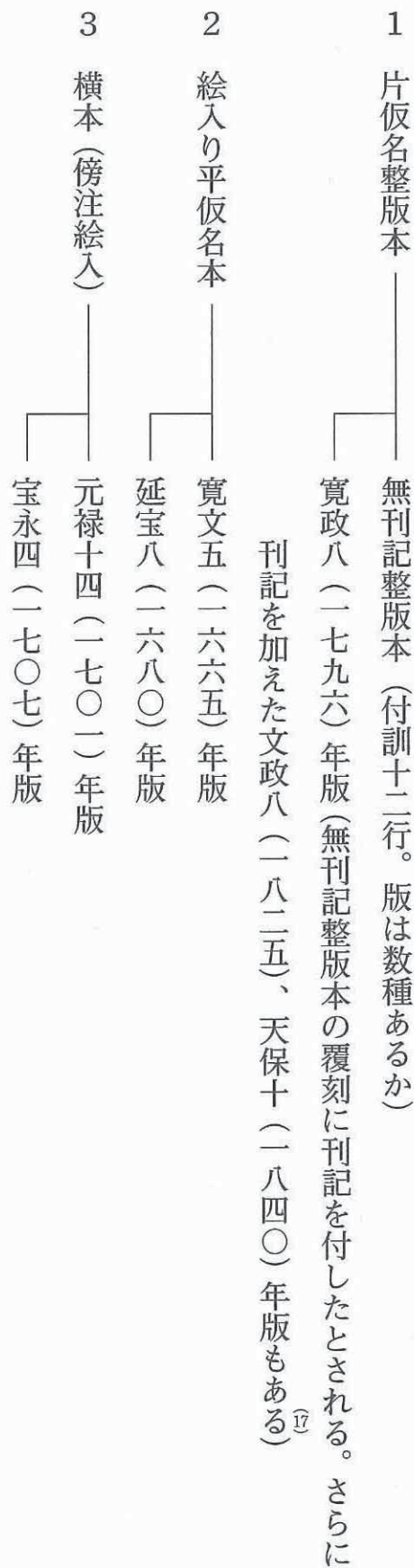


本学は3の中A、B、C、D及びCの系列に属する享保十二(一七二七)年版を所蔵している。なお本文上の分類に

よる1の元和九(一六二三)年版(平家物語初の整版本)も2の寛永三(一六二六)年版も所蔵しており、3では初めて挿絵が入った明暦二年版から横本の元禄十二年版まで、一通り見ることができるといえる。

②源平盛衰記の版本

源平盛衰記の整版本は次のように分類できる。



この中で挿絵があるのは2、3で、絵の数は多い。寛文五年版と延宝八年版、元禄十四年版と宝永四年版の挿絵はそれぞれ同じ物なので、結局、盛衰記の挿絵は二種しかない。本学では延宝版(及び同じ版だが無刊記の本も)と横本の宝永四年版を所蔵しているが、宝永四年版は刊記の相違する数種があるらしい。

3 図会ずえの類

このほか、近世後期になると『平家物語図会』（前編Ⅱ文政十二「一八二九」年、後編Ⅱ嘉永二「一八四九」年）、『源平盛衰記図会』（寛政十二「一八〇〇」年）など挿絵の多く入った読み物風ダイジェストが作られる。特に『源平盛衰記図会』はダイナミックな迫力ある画風で、初刷は精緻で繊細な技巧を凝らしている。本学はこの両作品のほか、『保元平治闘かつせん図会』『木曾義仲勲功図会』『南北太平記図会』『義経勲功図会』なども所蔵している。

錦絵については評価する識見を持たないが、「赤間ノ浦源平大戦之図」「為朝弓勢之図」が所蔵されていることを記しておく。

4 その他軍記物語関係

以上のように、本学には平家物語・源平盛衰記の整版本及び挿絵の研究資料が揃っており、他の軍記物語に関連する絵画資料も『前九年合戦絵巻』『奥州後二年絵巻』『平治物語絵巻常盤巻』『義経奥州落絵詞』などの絵巻のほか、『保元・平治物語』の明暦三年版及び元禄十五年版の絵入り整版本、『太平記』の元禄十一年絵入り横本、『義経記』絵入り整版本では正保二年版と元禄十年版、同じく『曾我物語』では元禄十一年版などを所蔵している。さらに軍記物語から派生した奈良絵本類として『清重』『八島』『静』や『新曲』（奈良絵本のほかに丹祿本も）があり、軍記物語ではないが武家の好尚の文学ともいえるべき『武家繁昌』『満仲』等の絵巻・絵本をも所蔵しているのである。室町から近世にかけての絵画資料研究にはめぐまれた環境と言えよう。若手研究者による新分野の開拓を期待したい。

四 おわりに

では、国文学研究の側では絵画資料から何がわかるのか、解析に着手する際の問題点を挙げてみたい。

版本の挿絵の場合、本文と絵との関係、つまりどのような場面がどんな理由で選ばれるのか、それは版本の年代や版元によって相違するのかがまづ注目される。構図や人物の造形が版本同士、及び奈良絵本に影響を与えているかどうか当然考察されるべき問題である。但し物語が同じものである以上、また本の大きさなどの条件により、意図的に参照したり模倣したりしなくても相似してしまう要素があることはやむを得ない。版本挿絵と奈良絵本の画面の影響関係の判定などには、一定の規準を引いておく必要があるのではないかと思う。

奈良絵本の場合は制作目的と大名文化との関わりが、その上に付け加わるであろう。近世初期美術工芸品の制作、流通、享受から、文芸のあり方の一端が照らし出されることになろうか。しかし作品の読みにそれらがどう関わってくるのかは、未だじゅうぶん熟してはいない課題である。絵画には絵画の約束事や造形それ自体の自立性があり、直ちに解釈を引き寄せようとするといわゆるこじつけになりかねない。絵画資料を通した文学研究の新しい方法は、これから練り上げられていくことになるのであろう。

最後に本学所蔵の平家物語四種、源平盛衰記二種の版本挿絵を対照してみる。同じ物語の同じ場面をどのように視覚化しているかという実例である。紙幅に限りがあるので、「入道死去」（高熱に苦しむ清盛を冷水で冷やす場面。但し元禄十二年版平家物語にはこの場面の絵がないので、地獄の車が清盛を迎えに来る場面を掲げた）と、「先帝入水」（安徳天皇を抱いた二位の尼始め平家の人々が壇ノ浦で入水していく場面）とを掲出した。どちらも平家物語の内容としては誰でも知っている有名な場面であるが、人物の造形などずいぶん相違することがわかる。

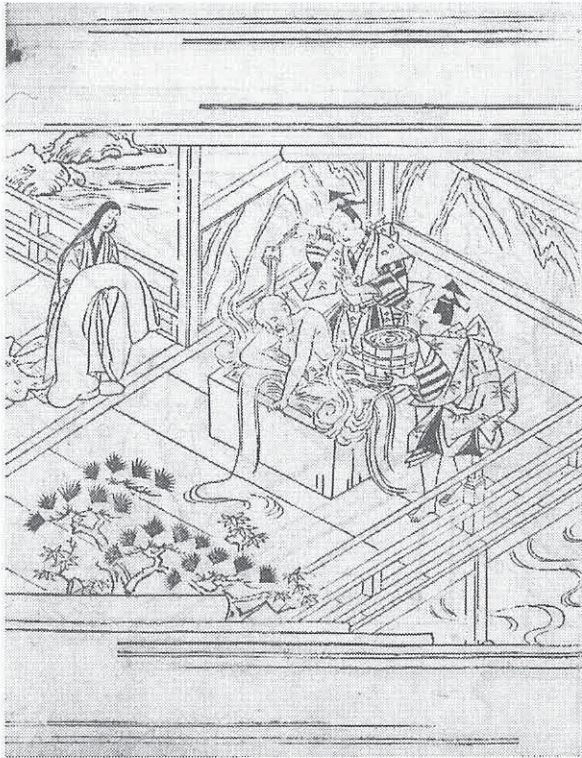
注

- (1) 石川透氏の一連の研究など。
- (2) 絵画資料の所在情報は、出口久徳「平家物語絵画資料・参考文献一覧」(小峰和明編『平家物語』の再生と転生) 平一五 笠間書院) に負うところが多いが、私の手許に集まっていた情報もかなり追加した。
- (3) 落合博志「鎌倉末期における『平家物語』享受の二、三について」(『軍記と語り物』27 平三・三)
- (4) 本稿の末尾に、平家物語四種、源平盛衰記二種の版本の挿絵を対照して掲げた。
- (5) この共同研究の詳細は「中世文学逍遙」<http://www2.kokugakuin.ac.jp/komedlit/> を参照されたい。
- (6) 加美宏・狩野博幸『源平盛衰記絵巻 全十二巻』(平二〇 青幻舎) に解説と一部の図版がある。
- (7) 伊黒佳穂子・金子恵里子・西野強「専修大学図書館蔵『古土佐源平合戦絵巻物』の翻刻と考察(上)」(専修国文77 平一七・九)
- (8) マイケル・ワトソン「『平家物語』の絵画化―プリンストン大学蔵『平家物語』絵本を中心に―」(『平家物語 批評と文化史』汲古書院 平一〇・一一)。
- (9) 木曾物語絵巻の紹介は、松尾葦江『軍記物語原論』(平二〇 笠間書院) 所収。
- (10) 松尾葦江『平家物語論究』(昭六〇 明治書院)
- (11) 岩波文庫『建礼門院右京大夫集 付平家公達草紙』に翻刻がある。
- (12) 大谷貞徳氏の調査による。
- (13) 小林健二氏の御教示による。
- (14) 山本岳史「翻刻と解説『恋塚物語』屏風」(松尾葦江編『國學院大學で中世文学を学ぶ 第二集』平二一・三)
- (15) 平家物語版本の挿絵の分類は出口久徳氏による。
- (16) 平家物語の整版本の分類は信太周氏「『新版絵入平家物語(延宝五年本)』巻九解説」(和泉書院 昭五六) に負うところが多い。源平盛衰記の分類は私に調査した結果である。
- (17) 高木浩明氏・岩城賢太郎氏の御教示による。

*調査・熟覧にご協力頂いた各所蔵者、関係者、本学図書館に深く感謝します。

「入道死去」

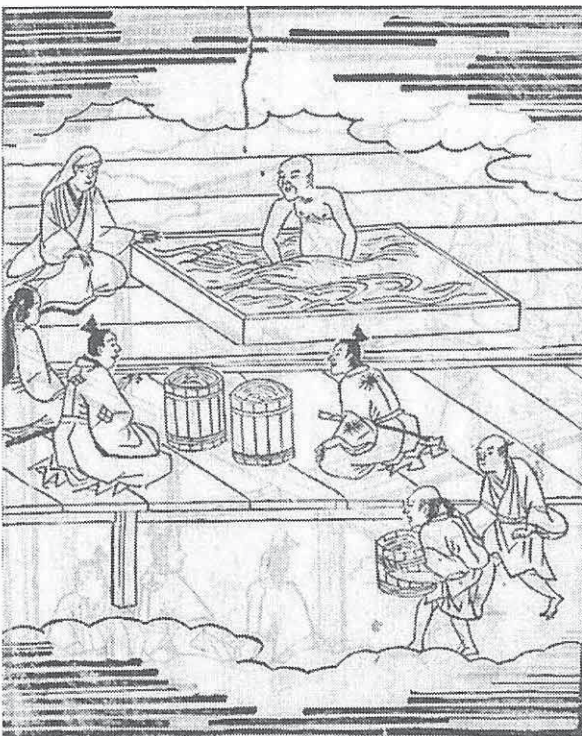
『平家物語』・『源平盛衰記』 版本挿絵各種



『平家物語』 寛文十二年版 卷六



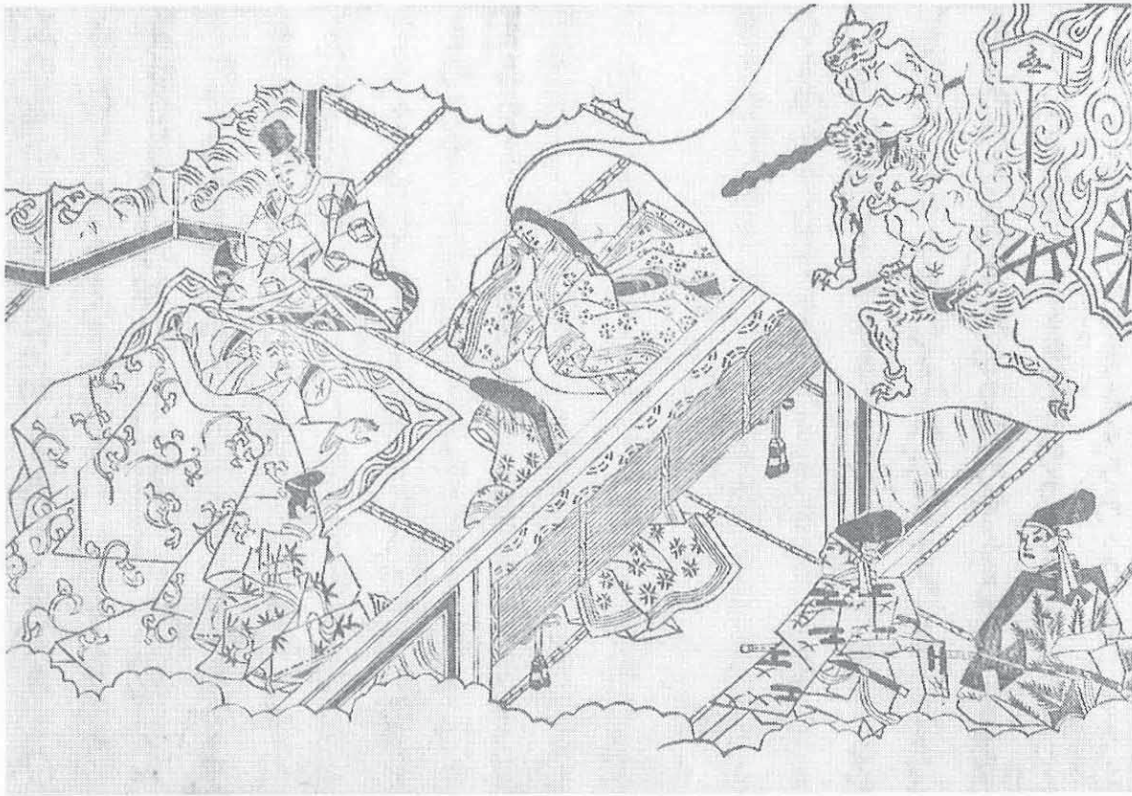
『平家物語』 明暦二年版 卷六



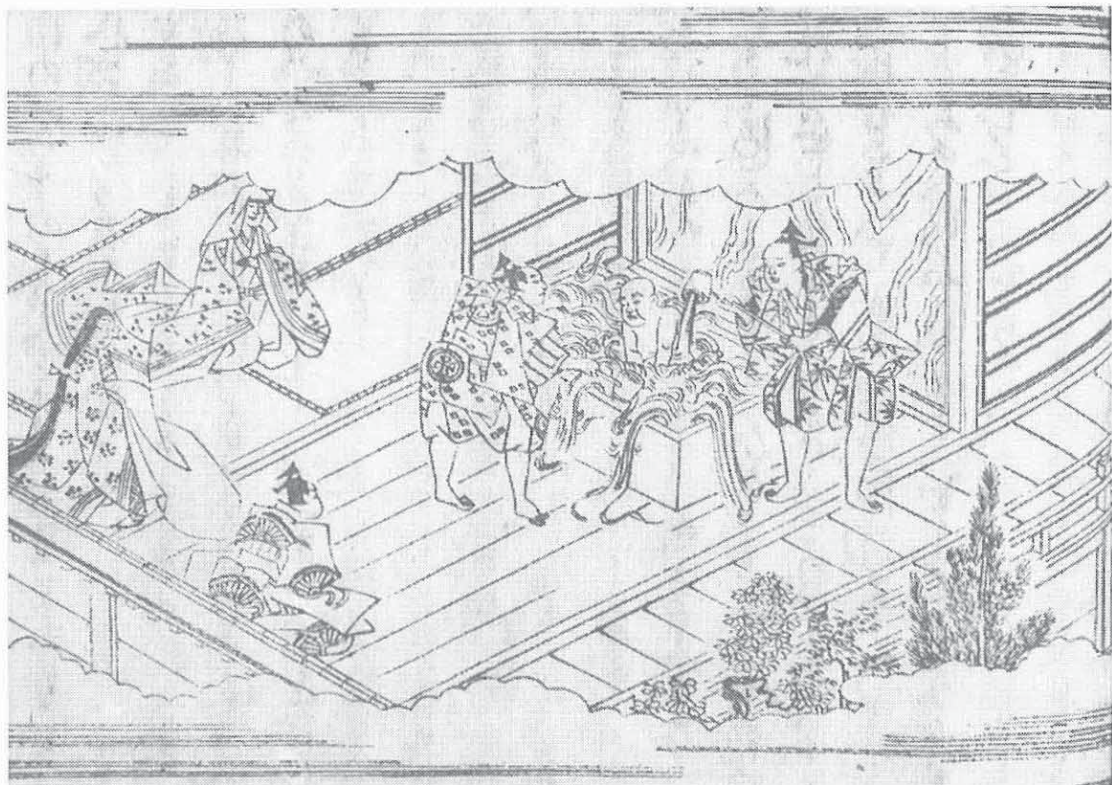
『源平盛衰記』 延宝八年版 卷二十六



『平家物語』 延宝五年版 卷六



『平家物語』元禄十二年版 卷六



『源平盛衰記』宝永四年版 卷二十六

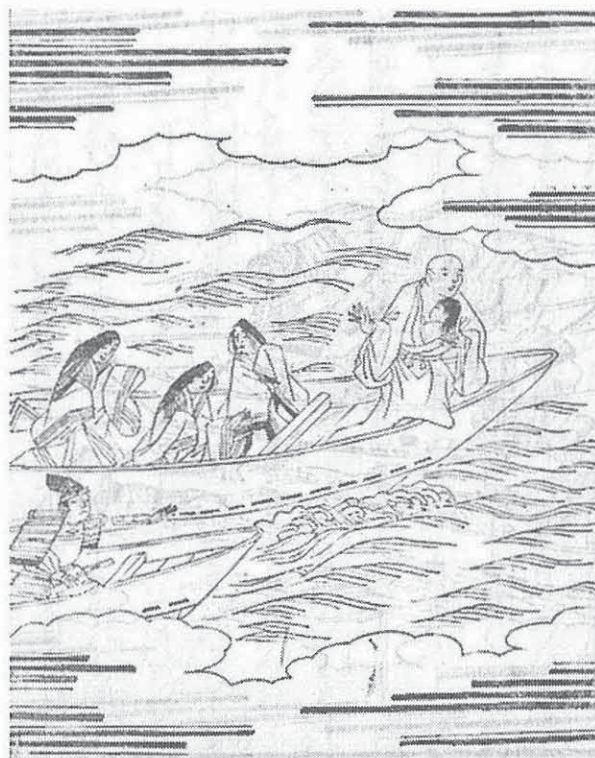
〔先帝入水〕



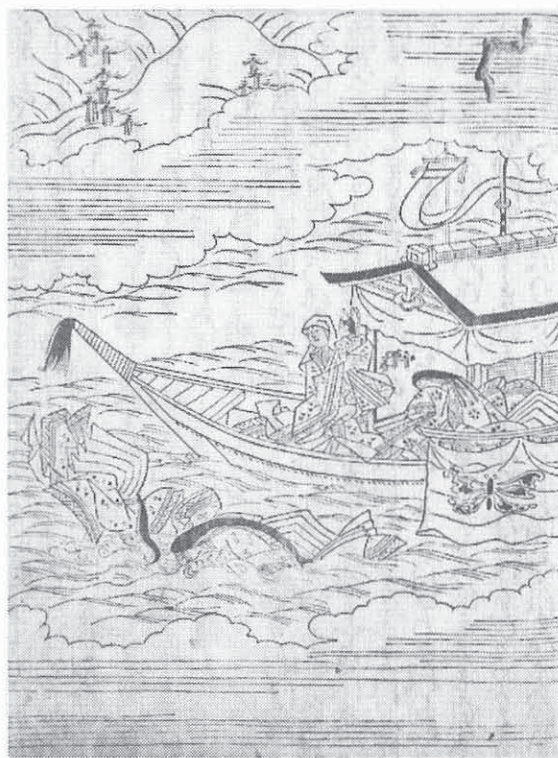
『平家物語』寛文十二年版 卷十一



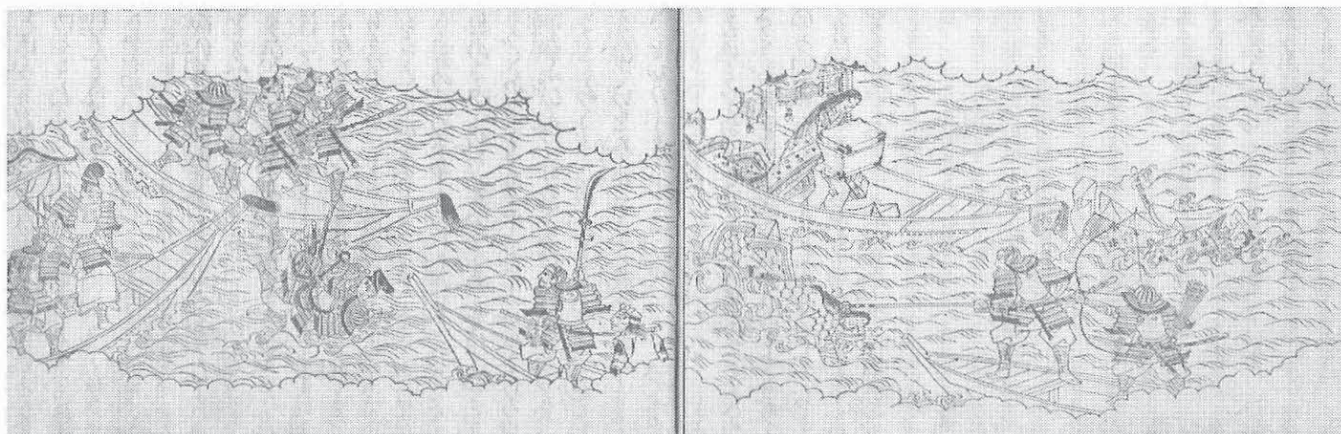
『平家物語』明暦二年版 卷十一



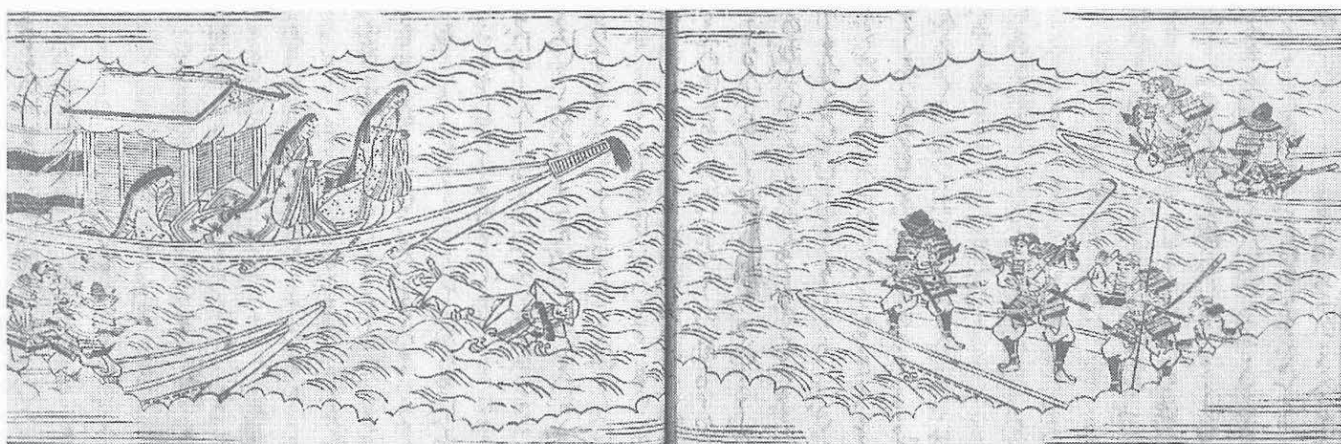
『源平盛衰記』延宝八年版 卷四十三



『平家物語』延宝五年版 卷十一



『平家物語』元禄十二年版 卷十一



『源平盛衰記』宝永四年版 卷四十三